ヒューマニズムをプロダクトする意志の集積が結果として創り出してしまうギター。

カリフォルニア州バーバンクとハリウッドのスタジオ"チェロキー"でジョージ・ペンソンに会った。クインシー・ジョーンズのプロデュースで新しいソフィスティケーションを記録している。ジョージの肉感的現代をクインシーのインテリジェンスがシェイプアップする作業なのだ。間違いなく、ジョージは新しいビッグステップを記すことになる。"今度のアルバムはとっても楽しみなんだ。ぼくたちの仲間のリーも手伝ってくれているしね、とってもゴージャスなものになると思うよ。"

"ゴージャスだなんて君みたいじゃないか。"　"ハハ、それはそうとアルバムジャケットはノーマン・シーフが撮ってくれるんだよ。"　"そいつはすごい。"　ぼくたちの会話はとぎれることがない。

リーがやってきた。甘いマスクとスリムなボディ、ミュージックシンクと呼ばれるタレンティドなリー。ジョージとリーの楽しそうな会話が弾む。今度は日本のイパニーズのオフィスで会いましょう。とリーが言う。OK、じゃSAKE　を用意して待ってるよ、と僕。リレイションシップとは本来こうしたものだ。お互いの分担を大げさでなく自らのプライドを賭して実行していく、というバックグラウンドがあってこそ、キープされる。

ジョージもリー　も　ぼくたちのクラフトマンのヒューマン・マインドを搾り出したイパニーズから弾き出されるサウンドでぼくたちとインタープレイをしてくれている。イパニーズを理解してもらうには本来はこうしたぼくたちのクラフェローズのサウンドを感じてもらうのが一番ストレートなのかもしれない。イパニーズは本当に優れた友人たちに恵まれ、ギターづくりをヘルプしてもらってきた。ジョー・パス、スティング、パット・メセニー、ジョン・マクヴィ　　なビューティフルな人間たちだ。永い間変らない彼らのぼくたちへのフレンドシップ。ぼくたちは彼らに、ハートの存在を教えてもらった。ぼくたちは彼らに「完璧」をプレゼントしなければならない。彼らのヒューマン・マインドを「科学」の力を借り、より肉体的なモノに昇華させなければならない。